

ジョン・マルカキス教授

栗本 英世

「アフリカの角」地域の政治学的研究で、国際的に著名なジョン・マルカキスさんが、昨年7月から10月まで、外来研究員として国立民族学博物館（民博）に滞在された。9月末に民博で開催された本学会の第1回学術大会で、彼がおこなった公開講演「民族紛争と国家—北東アフリカにおける最近の動向」を聞かれた方も多いことと思う。

マルカキスさんは、多数の著書、編著を發表してこられた（文末の著作リストを参照されたい）。ここでは、その学問的業績とともに、3ヵ月間親しく接したなかで窺うことのできた、彼のひととなりを紹介させていただきたいと思う。

マルカキスさんは、1930年、ギリシアのクレタ島のお生まれである。1980年以降は、故郷にあるクレタ大学歴史考古学科の教授の任にあるが、その半生は、欧米とアフリカを遍歴した波乱に満ちたものであった。

マルカキス一家は、第2次世界大戦の直後、移民としてアメリカに移住した。当時15歳であった彼は、やせっぽちの、目がぎょろりとした少年だったらしい。移民船のなかで、マルカキス少年の心を奪ったのは、食卓に山盛りになった真っ白いパンと、ボールいっぱいバターであった。バター付きパンだけで満腹し、おかしには手をださない彼は、アメリカ人船員に笑われたらしい。一家は、ニューヨークに落ち着き、マルカキス少年は下町のレストランでアルバイトを始めた。従業員に出される食事をたらふく食べる彼をみて、店長は「君はやせの大食いだな」といったという。

マルカキス少年は、貧しい、戦時下のギリシアを去り、豊かなアメリカと出会ったのだった。私には、この体験が、のちに彼がマルクス主義に傾倒する遠因になったように思えるのである。

アメリカ市民となった彼は、アメリカ軍兵士として、朝鮮戦争に従軍されている。そして、広島の江田島にあった基地に滞在した。その、40年後に日本を再訪されたわけだが、当時と現在を比べて、同じ国とは思えないほど、大きな変化をとげているとおっしゃっていた。

さて、学業優秀であったマルカキスさんは、ニューヨークの名門コロンビア大学へ進学し、アフリカの政治学的研究に従事した。同大学で博士号を取得されたのは、1965年のことである。ちょうど、アフリカ諸国が次々と独立し、ナショナリズムが高揚していた時期であった。彼は、多民族国家ナイジェリアに関心があり、現地での調査を構想されていたが、たまたまエチオピアのハイレ・セラシエ1世大学（現在のアジス・アベバ大学）に政治学講師のポストがあり、エチオピア行を決心されたのである。彼のアフリカの角とのかかわりは、偶然めぐりあわせから始まったのだった。ハイレ・セラシエ1世大学では、1965年から4年間助教授をつとめられた。その時の調査研究の成果をまとめたのが、最初の著書『エチオピア—伝統的政体の構造』（1974年）である。

その後、先生はレソト大学、ザンビア大学、イギリスのエジンバラ大学などで教鞭をとられながら、エチオピア、スーダン、ソマリアといったアフリカの角諸国で調査をおこない、現代政治の研究を続けてこられた。とくに1974年から始まったエチオピアの革命には大きな関心を抱かれた。かつての学生や同僚のおおくが、逮捕や粛清されたこともあって、彼にとってこの革命は、たんなる研究の対象ではない、切実な問題であった。『エチオピアにおける階級と革命』（1978年）の共著者である、アジス・アベバ大学のネガ・アイエレ



ジョン・マルカキス教授

氏も、1977年に虐殺されている。

彼は、基本的にはマルクス主義者であり、階級闘争を分析の主要な拠り所としているが、エチオピアの社会主義体制にたいしては、民主的・革命的勢力の苛酷な弾圧のうえに成立した、軍事独裁政権であるとみなし、

きわめて批判的であった。アフリカの社会主義国家については、のちにM・ウォラー氏との共編で、『アフリカの軍事マルクス主義体制』（1986年）にまとめられている。

マルカキスさんは、その批判的立場のため、メンギスツ時代のエチオピアを訪問できなかったし、また、しようとも思わなかった。これは、彼の良心のあらわれといえる。そのかわり、社会主義体制の悪に眼をつぶり、エチオピアでの調査研究を続ける学者たちを「道化」と呼んで、軽蔑していた。

マルカキスさんは、きわめて明晰な理論家で、歯に衣を着せぬ、辛辣な批判家でもある。しかし、教条主義的で冷酷な印象をうける人ではけっしてない。また、日本式に言えば、還暦をこえた先生であるが、権威をふりかざすことのない、フランクな性格の方であった。日本滞在中も、さまざまな立場の人たちと、酒を飲みながら、自由で徹底的な議論が好まれた。

本学会第1回学術大会での公開講演では、紛争の原因を、専制的な国家がコントロールするさまざまな資源へのアクセスをめぐる闘争と位置づけつつ、闘争の主体は、階級ではなく民族であると述べられた。ここに、マルカキスさんの理論の、

あらたな展開をみることができる。ご本人も、階級や宗教だけでなく、民族やエスニシティといった概念を用いないと、アフリカの角の政治の動態は理解できないと考えるようになったとおっしゃっていた。

今年マルカキスさんは17年ぶりにエチオピアを再訪された。革命の激動を生きのびた旧友たちとの再会を楽しまれたことだろう。民族単位の地方自治の確立など、新政策をおしすすめる新政権をどうぞ覧になったか、興味のあるところである。

現在、マルカキスさんは、故郷のクレタ島で夫人と、まだ幼いふたりのお子さんと暮らされている。ザンビア生まれのイギリス人である夫人とは、最初ルサカで出会い、数年後にイギリスで再会して、恋におちいり結婚したという、ロマンティックなエピソードがある。

マルカキスさんの、人生と研究にたいする情熱はおとろえをしらないようだ。これからもお元気で、著作をつうじてわれわれに刺激を与えつづけてくれることと、また来日される機会のあることを願うものである。

マルカキス教授主要業績

Markakis, John 1974 *Ethiopia: Anatomy of a Traditional Polity*. Oxford: Clarendon Press.

Markakis, John and Nega Ayle 1978 *Class and Revolution in Ethiopia*. Nottingham: Spokesman. (reprinted by the Red Sea Press, 1986)

Markakis, John and M. Waller (eds.) 1986 *Military Marxist Regimes in Africa*. London: Frank Cass.

Markakis, John 1987 *National and Class Conflict in the Horn of Africa*. Cambridge: Cambridge University Press. (reprinted by the Zed Books, 1990)

Doornbos, M., L. Cliffe, Abdel Ghaffar M. Ahmed and John Markakis (eds.) 1992 *Beyond Conflict in the Horn*. London: James Currey.

(くりもと えいせい 国立民族学博物館)